〔新刊紹介〕

中本大編『名庸集　影印と解題』

大坪　舞

五山文壇はいつまで機能していたのか。近年、編者である中本大氏は羅山の台頭により林家が確立した寛永年間よりさらに下る、寛文年間にも後水尾院を中心としに五山文壇が積極的に活動していたことを提唱している。

本書は後水尾院主導による文事が盛んに行われる寛文年間、後水尾院に献上される『名庸集』という、従来全く知られていなかった資料を学界に提供したものである。三巻よりなり、第一・二巻は、信多純一氏旧蔵で神戸女子大学古典芸能研究センターに寄贈された『名庸集』の影印、第三巻は信多本『名庸集』の一部であった国立国会図書館蔵『燈分集』の影印を収録し、解題を付す。

解題では、まず『隔蓂記』寛文四年（一六六四）四月五日条に見出される「叢首座」すなわち菊隠慧叢が所持する『名庸集』一冊を鳳林承章が後水尾院に献上する記事を端緒とし、菊隠の足跡を詳細に辿る。文才が喧伝されることはないものの、相国寺派を支える実務家の禅僧として活躍したことを明らかにする（Ⅰ　菊隠慧叢について―『名庸集』研究序説―）。

これを踏まえて、信多本『名庸集』の書誌を繙き、菊隠との関係も想定される貴重な資料であると指摘する。本文の内容は、中国の儒道二教を網羅する人名を表題に掲げ、典籍を博捜して関連する情報を遍く修正した「広汎かつ膨大な人名集成」であり、用途は五山僧の詩文作成の便に供することが第一義であったとする。また、同書が取り上げる典拠を具体的に検討し室町時代以来の本邦五山禅林文壇の伝統を踏襲しつつ、東武の林家や、京都上層衆の同時代的動向をも見据えた成果であったと示唆する（Ⅱ『名庸集』の書誌）。

さらに、後水尾院が『名庸集』を献上せしめた寛文年間における後水尾院と五山文壇の関わりについて、「西湖詩」をめぐる文事を端緒として論じ、室町時代五山文壇が蓄積した成果を認識したうえで、新たな文学的潮流を相対化させる試みがなされていたことを指摘する（Ⅵ　後水尾院と寛文年間の五山禅林文壇）。

このように、本書は単なる未紹介史料の影印紹介・解題という枠を越え、文学史を鮮明に描き出す論文集ともなっている。

（思文閣出版、二〇一三年一〇月、全三巻、総一一八二頁、三八〇〇〇円＋税）

（おおつぼ・まい　本学博士後期課程）